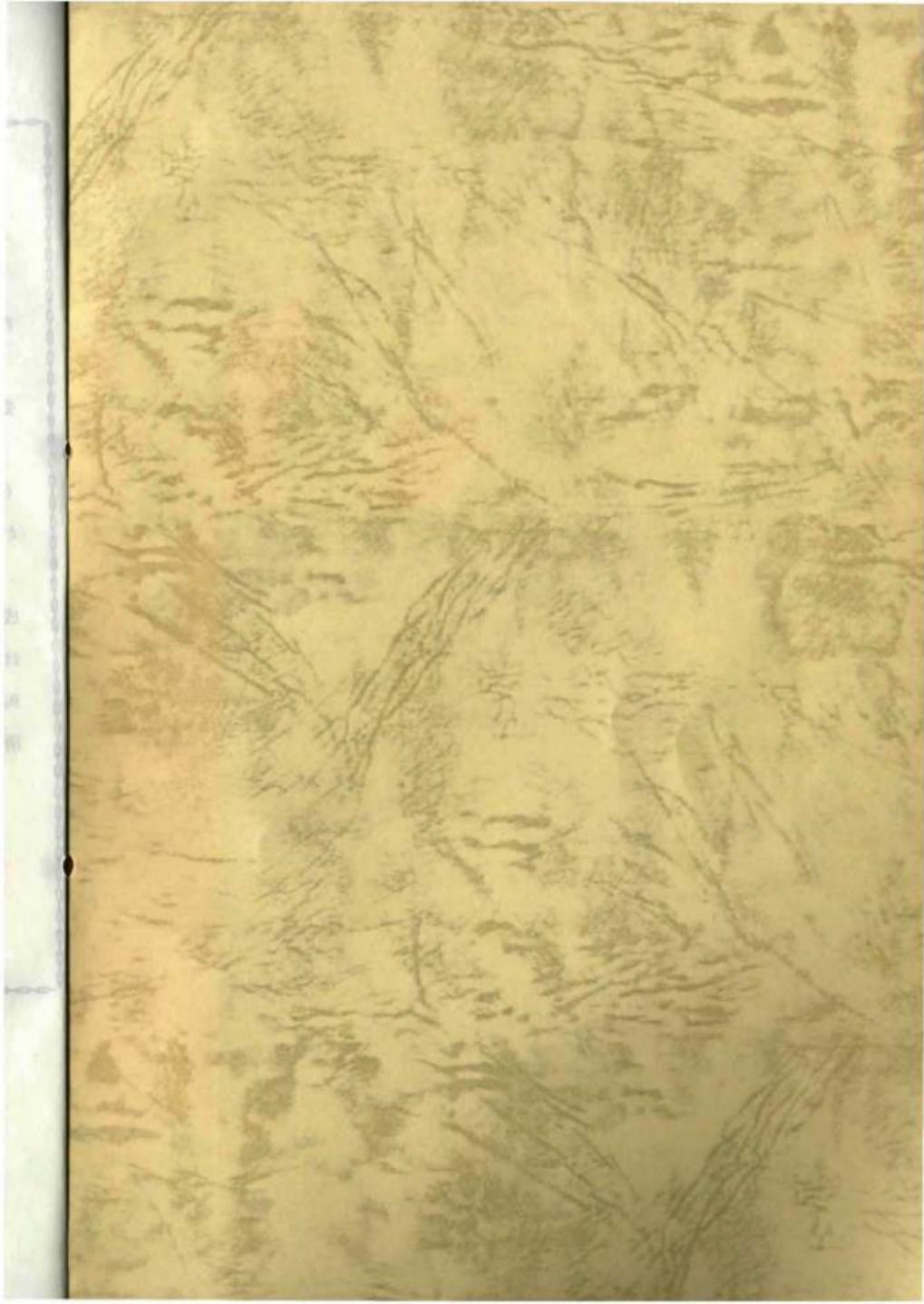


山川の文化財

第7集 民俗芸能



鹿児島県揖宿郡山川町教育委員会



目 次

○ 発刊にあたって

| | |
|------------|----|
| 一、成川南方神社神舞 | 11 |
| 二、大山棒踊り | 14 |
| 三、大山馬方踊り | 17 |
| 四、成川前園馬方踊り | 20 |
| 五、利永琉球傘踊り | 25 |
| ○ 編集後記 | 29 |

「題字は 東 栄寿氏（山川町元助役）」

表紙写真（成川区）小田十三氏 提供

発刊にあたって

文化財は、祖先のたくましい創造力、たゆまざる努力によって生み
育てられた貴重な財産であります。

私たちは、これらの文化財を損傷したり破壊することなく、完全な
姿で、次の世代に伝えてゆく責務を負っています。

私たちの山川町では、文化財保護条例が昭和47年に制定されるとともに、文化財保護審議会が発足し、精力的に文化財の調査研究と活用
が図られているところです。

この第7集では、町内に伝わっている民俗芸能をとりあげました。
成川南方神社神舞については、谷迫ハルエさん、大山棒踊りについては、
前村治さん、大山馬方踊りについては、上薗善信さん、成川前薗
馬方踊りについては、川畑広志さん、利永琉球人傘踊りについては、南
清孝さんのご協力を得ました。記して謝意を表します。

昭和61年3月10日

山川町教育委員会

教育長 山下三郎

一、南方神社神舞

一、名 称

南方神社（諏訪大明神）神舞

黒面、（黒）、腰

二、所在 地

山川町成川中野南方神社

白面、（白）、腰

三、時 期

現在はホゼの時に行なわれる。（十月）

白面、（白）、腰

四、場 所

南方神社に奉納した後、各部落の入口にて、四方鬼神、祝子舞等を舞い、成川生活改善センターに舞台を作り夜六時頃より始まり夜明近くまで神舞三十三番を奉納したが現在は九つ位しか出来ない。

五、芸能 の 内 容

1. 由 来

諏訪大明神の神舞は、いつの時代に伝わったか詳細は、明らかではないが、中野に居住しておられる有馬家の系図によると慶安二年（一六四九年）島津光久公の御前にて有馬純定が神舞を相勤めたと記されている。諏訪大明神に伝わる面は三十数個あったが、昭和二年の火災により、古文書と共に焼失して、現在残っているのが次の面である。

田の神、翁、五方鬼神の面（青、赤、白、黒、黄）手力、神明、小神子、滝田、住吉、弊立、の十四個だけ残っている。面は古く、作った時代もそれぞれ異なる。

2. 構成する人々

成川青年会が中心になり、古老や壮年の人達の指導を受けて復活した。

神舞を、奉舞する人員は、二十数人、太鼓二人、笛二人

3. 組織

成川青年会、及び成川区民によつて挙行される。

指導の古老及び壯年の名前

中村寅三郎、中村盛雄、中村重則、中野仁右エ門、豊崎喜一、福ヶ迫善一、中島喜蔵

4. 扉装

1. 祝子舞（ネギ）赤の狩衣、鈴、冠

2. 田の神 白タスキ、着物、タツチャヤゲ袴、白タビ

3. 長刀

白タスキ、ハチマキ、着物、タツチャヤゲ袴、白タビ、毛頭

4. 弩立

狩衣、弊

5. 二本刀

白タスキ着物、タツチャヤゲ袴、白タビ、白ハチマキ、毛頭、刀

6. キンネン玉

右と同じ

7. 五方鬼神 白 着物、白袴、タビ、白面、面頭（白）セシス、弓、矢

赤 " " " " 赤面 " (赤) " シヤク杖

黄 " " " " 黄面 " (黄) " 白布、刀

黒 " " " " 黒面 " (黒) " 弩

青面 " (青) " シヤク杖

5. 設備

ホイどん達が山に行、松、竹、を祓清めて松竹を切つて来る。

御輿を正面に置き、周囲を松神竹でかこみ、正面が少し見える位にする。

舞台は、畳三十枚敷つめる。

四方の角に松竹を立て、それに注繩を張りめぐらす。

樂屋から舞台に出る花道を作る。

正面には、庭燎（にわび）をたく。

6. 演目（おどりの種目）

神舞の種類は三十三番ある。

祝子舞、会舞、清山、猿女舞、鬼神、紫神舞、指神舞、扇子神舞、弊神舞、大剣、大抜、弊立、鬼神、力長刀、踏劍、田の神、通り、小神子、滝田、地割、咲姫、重山、奉仕舞、神武、剣くぐり、御笠矢拔、住吉、手力、神明

7. 芸態（おどりかた）

一、諸準備は成川区長及び古老達により進められ、着付等は古老壯年等の手を借りる。

二、成川青年会員がそれぞの役割をきめて神舞をつとめる。

三、集合場所は、成川生活改善センター

四、各部落を昼間回り、夕方より改善センターにて行なわれる。

五、三年に一回が神舞の年にあたる。

六、神舞の順序（現在行なわれている。）

ネギ、キンネン玉、矢抜鬼神（四方）、田の神、弊立、五方鬼神、二本刀、長刀、十二人大剣

8. 音樂

大鼓二、笛二

9. 歌詞・詞章

地割 祭文

一、夫れよろいとは、一昔は三角の一面ものにてありしとき、神宮皇后異國退治のおん年八月の腹にてありしとき御身によろいたらんによつて、わきたてと云ふことを添へ、今は四角上等の御よろいとは申すなり。

二、◎はつはるの、よき日に具足の、ちりとりて、今こそきみに、きせながのいと

三、◎夫れ神代にありし、天のははやと申奉るは、天のひほうなり、弓はきうなり、矢は直なり、きうちよくのさいをもつて人にさしき、軍切にたいして相戦ふ時は、三たびその名を呼ばわつてゐるときは、一つとして当らずと云うことなし、されどここにてかしこき納むるをしじゆうとなり、又あめはかしこ、荒振る神に向ふ時、給はいし弓ははつこうの弓なり、されどかのひほうの弓をもつて地を割矢をさすときは、五方より入り来る災難を払いしりぞき、すなわちしんめいおろごうの靈地となることうながいなし

◎梓弓造り下ろして、つるかけて、長く宝と祝いそめけん

◎梓弓、造り下ろして、つるかけて、我が氏人の、悪魔払はん

◎たちもそでの進風になびかん、神はよに、あらあじもの

矢拔 祭文

青 神々の、天の逆鉢振る時は 亂れし鬼もかなわざりけり（ん）

赤 日之本の國の肇めを尋ねるに、鉢のしづくや、葦原の里

白 谷は八つ嶺は九つ、塔は一つ、鬼の住家は、あららぎの里

黄 天之戸を、押開けかたの、雲間より（い）、神代の月の、かげすのこえ

○かぜせいと、年あらたまつて、山うごかず、かすがの山はせいある山か、せいなくば、山守りす
えて、我が山にせん。

五方鬼神 祭文

五方鬼神 祭文

東青 谷は八つ、嶺は九つ、塔は一つ、鬼の住家は、あららぎの里

南方 黑 日之本の、国の大河を、葦原の里

西方 白 桦弓、造り下ろして、つるかけて、我氏人の、惡魔払わん

北方 黒 天之戸を、押開け方の雲間より、神代の月のかげすのこえ

中方 黄 出雲路や、八雲むらくも、たづくわせて、振らずの剣、罪は切りけん

自己名稱

青 謹請東方 青体木神重宝 手置帆負乃命

赤 謹請南方 赤体火神重宝 火口乃命

白 謹請西方 白体金神重宝 金山彦 乃命

黒 謹請北方 黑体水神重宝 水波乃壳乃命

大地主 乃命

幣立

青幣、和幣、さかきの枝を、手に持ちて、うたえば開く、天の岩門

田之神　（一）祭文樂　田之神

春田うつ、夏早苗取る朝より、秋の夕を守る御田之神夫神代に十万丁の御田あり、保食の神の作り
初めし御田なり、この田の一つの水口より、湯末の末の末までも、守りなされる御田之神、されば
其の十万丁の米なれば、其の穗の長さが一尺八寸、プラプラ、プラ・・・・・

此の穂の米なれば、粒の太さが一寸八分、コロ、コロ、コロ・・・・・

此の米を飯にかしげば、青人草の命をつぐ、酒に造れば、いずみと湧きて、不老不死の薬となる、
餅につけば祝の「かちし」となる、是をふくめし青人草夏の日にも暑からず、冬の夜も寒からず、
此の田之神の皮膚の如く、赤ら赤らと色もよし、我を知らすか青人草、十万丁を始めとして、一丁
田の水口までも、ゆわくれて、耕す春の朝より納むる秋の夕までと、守る神なれば、今日の大神樂
を、しりくめなわを引まわし、大棒の柱を立て、宮殿を飾り天照大神を始めとし、日本國中三千余
座、天神、地祇、八百万神を請じ奉り、宵も過ぎ夜半も過ぎる頃までも御田之神を請ぜんは、國
土の人の命をつぐ、田地のもとをわすれたか、それは免もあれ角もあれ、天照大神の勅を受け、御
田を守る我なれば、五穀豊穣の舞を舞おうよ、神樂男あらば喜びの神樂を囃せ舞を舞おうよ。

田之神　（二）祭文

又此飯がいは、如何なるものかと思ふらん、子孫繁昌子安の木を、一尺二寸にたいどつて（体取）
中をくぼめて、作つたり、又此のかがみは俺が揃つて届だところを、ひょうしてうつ、とこに多か

ように、斯うもり、斯う盛り、こうもりとあるは、十七八の女性達の、こうもり、こうもりとあるを、ひようしてうつかようには。

又此の飯がいのくぼい所に盛つたるもの、喰ふによつてこそ、わかいの葉ともなるは（を）しらんか、われ又若い氣色で舞を舞おうよ。

咲 姫 祭 文

トリのはうさの声として、天宇津命是れまで請じ給ふ、天照大神天の岩戸にましますにより、岩戸前を一さし御らん候へ。

柳天地十二代勧請し奉る故、如何となれば国津の神等心猛きによつて、天照天神天の岩戸に籠り給ふこと己に六百三十年が間なり、八百万の神々集り給ひて、七日七夜舞神樂をし給ひ時、榦葉を根ごしにして、岩戸の前に立て給ふ、第一の枝に水晶の玉を掛け、第二の枝に天の香山の土を取つて鐘を鑄奉る、一番の鐘を紀伊の国日神宮とあがめ奉る、二番の鐘を懸け奉るなり、第三の枝に五色の弊帛を附け奉ること、天照大神も意向はし奉るところなり、不慶が浦に講じ、子丑未辰戌掛けて立てる。是悪魔降伏す、十堀劍は諸毒七難の厄を払ひ、内じ所の八咫の鐘は、己に心八葉の神殿を開く、萬法圓備の神靈の玉は、榮耀榮華の邪性に触れず、七五三の住連繩、五治散身の極葉を飾る。宝珠のしくのを援く、どうどうとなる大鼓の響には五水三根津の齡をさます、大祝詞ごとのまいまいとして、くじやくをふむは声々に、笛はかりうびんの声となし、颶颶の鈴の声には、生死、長夜の眼を醒ます、さればかの鈴の文に曰く。

以我行神力神道、加持力神変神通力奉供養に住す、されば此の文を唱へ奉れば、日本六十余州の大少の神祇の殊に、天照大神も御納受と見え候ほどに、此の所に宮人のましまさば、秘極の神樂を始

め候らへ。

重山祭文

何々岩戸を祈れとやな、慎み敬ひかしこみかしこみも申す、掛けまくも畏こき天の児屋根命をして申さしめんと、天の香山の五百枝の真榾を根越しにして、上枝に八尺瓊勾玉を取りつけ、中枝に八咫の鐘を取り繋げ下枝に日鷦かはげる、青和幣、和幣を取りしでて、天の太玉命、大御幣を取り持たして天照大神に訴え奉り給うといえども、御納受も見えず候ほどに、住吉大神を請じ広く厚く祈らばやと存じ候、住吉の大神やましまさば、あれあれみそなはしたまえ。

天照大神、岩戸に籠り給ふによつて、住吉大神と、ともに祈らばやと存じ候ほどに、宮人のましまさば、秘極の神樂を始め給へ。

滝田祭文

柳夕の星の神と云うは、岩おくの神は、さひせひのせひ、こさくの神はせひこくのせひ、岩つちは、大日のせひ、又みかの早目ひのはや日の子成、みかづちの神は、是神代の副將軍なり、ふつめしの神は將軍なり、神代のあら振る神を、平らげ鎮めて、天下大平になしたは、此の二神の軍功なり宮人のましまさば、秘極の神樂を始め候らへ。

清山祭文（一）樂ドツヂユス

大鼓○ 清山に、我がひくしめは、かねが幣、黄金の御幣を引いて参らん、黄金の幣をひいて参らんや。

◎ 干早振る、ここは高天原なれば、集ひ給え、ヤー四方の神々。

◎ 立てやなぎ、とこ立ち給え、立てばこそ、姿もよけれ、ヤー、しなやかに。

舞になる、桑、扁柏子、

一回背負って一往復で座る。

祭文

◎ 清山に我が引く幣は、以下大鼓に同文

夫れ宵の一天に 清山大神のみさきを静にとき（説）奉る、之より東に当つて十万里あり、十万里が其の奥に高き峰あり、峰が名を、こうりがたけこうそが峰と申す、峰のふもとに丈、一丈三尺、守の石神御立ますと、男参り、拝み奉れば、八夜や夜らくな笑みをふくめたり、かんむりのこしをかたむけ、五水三根津の花と納受たれ給ふ。又女人参り拝み奉れば、もとの石と立ち給ふ石神。

一番

何國よりとは知らぬども、昔武息大王と申す御神、夜な夜な通はせ給ひ時、懷妊、賦つて月満つる、いまだ、行順如月の御年、御産のひぼを解き給ふ。

二番

急ぎ男子にてやましますと、尋ね奉れば、男子にて やましままで、眉目よき、姫宮にておわします。彼の姫の眉目のよきこと、先づ空には十六の大國、五百の中國、一千の小國、むじようそく、三国、唐土、天笠、日本我朝、新羅（しらぎ朝鮮）もろこしにても、彼程貴ぶ姫を。

三番

何国にてや拝み奉らん、是より東方、甲乙の方と定め、彼の方に当つて、五百万里あり、五百万里が其の奥に、ほつしようとて、八つの大川流れたり、大川の川上に、夜の間に、一万本の杉山出来たり、彼の山の中にも。

清 山 (二) 祭 文

ちその木とて、花の木三本出来たり、彼の木の下に 祝ひ拝め奉り、志を以て、山谷を形取、宵の一天に清山大神とは、舞い拝めたり。

大鼓 ◎

ゆるむとも、よもやのきしの、かなめんし 鹿島の神も、ヤアー あらんかぎり

◎ 清山に みしばをかけて よいのまに はやのかぜこそ、ヤンガノ 吹き来たり 神風ならば

ヤアー 舞はしようらん

舞になる 楽は 扇柏子

最初は、やりくろ 戻つて二回目の「かわり」に舞たをす、これからせんべをふむ。

神 武 (一) 祭 文

それ敬神とは 神を敬ふ、本覚とは身体を顕わす、神武が大鼓を鳴らすによつて、和光と名付ける櫛熊野神社と申すは、もとは伊邪那岐命 事解之男命、速玉之男命と祝座堅す、第二番に雷 四國の神社と祝座堅す、第三番に黒神の神社と祝座坐す、第四番に筑後の国高良八幡と祝座坐す、第五番に彦三所神社と祝座坐す、第六番に熊野十二所神社と申すは、彦の御山北谷より五穀の種子を申し下し、一切の四方の衆王を利益せんと、の給へば、心まちまち邪険にして称がたなく、宮しき所と申させ給へば、ををやけ参り、神社は宏大慈悲の神なれば、もとのいつくも、をんとうと、の給ふ、しちくもう 郡音無川の川上に、桂木椎木三本の梢に御羽を休め、

夜は月とげんじ星は日とげんじ、丈一丈の熊とげんじ、一万の鳥二万の鳶三万の・・・
四万の竜五万の鷲、十万のたかとげんじそうらいしが、岩田川の畔に住みし竜官と申す人の見付参
らせ神社と崇め奉る、新宮は伊邪那岐、本宮は伊邪那美ならん、大山は比童神社、滝本には歲王神
社、ようの峯はようやの神社、一の鳥居はきるめの王子、二の鳥居は、ふじ白の王子、三の鳥居は
内宮相殿の御神も御納受を垂れ給ふ、夜のすがら月を御室を詠むれば、万の神の集り給ひて神遊び
とや。

答

柳も神武のゆはれはいかに

◎ 神武のいはれとや、地神五代の未彦なぎさたけ。

祭文

神武 (二)

鶴草草葦不合尊の御子さつて、神武とは申すなり、柳 大鼓のいはれはいかに、

◎ 柳 大鼓のいはれとや、表は月をひようず、裏は日とひようず、くみせんのまねんだれ 彼の大鼓
を鳴らすによって、天下泰平、国土安穏、殊に天照大神も御納受座坐ば、みか月の前を一さし舞は
ばやと存じ候ほどに、此の所に宮人の座坐ば、秘極の神樂を始め候へ

剣 くぐり 祭文
祭文は、地割の桙弓の所、全部、同順、同文

御 笠 祭 文

◎ 三笠山、三笠の山のひめ小松 もろてにもちて、神を講ぜん

◎ 夫れ、三笠と云ふは、昔人皇四十八代聖德太子はこけねんすみして有りし時、伊勢天照大神は、丹波の国そきの峯にて移らせ給ひし一日の内に、ちくろくにゆるされ給ひしとき、四方のしようず、さいど、ほうへん心かしこくして、三笠とかざらせ、かの大奉に付け奉れば、三がい笠とげんじて、四方のしようすに、あがめておさまい給ひし時

◎ 晩の、寅、卯の柱のつよければ うれしも うちは 千代をこへる
たちもそでの おい風になびかん 神は世にあらあじもの

奉仕舞 祭文 (樂 ドツヂユス)

大鼓 ◎ 今月のよき日選いて、供へたい、七重の供へ神きこしめし七重の供へ神聞召しめしや

大鼓 ◎ 千早振ることは高天原なれば、集ひたまへ、四方の神々

◎ ヤ一、宵のまにはやの風こそ、やんかのや一吹き来たり、神風ならばヤ一、しなやかに。

舞になる 樂 扇柏子

一回背負つて 一往復ですわる。

祭文 ◎ 今月のよき日を、以下大鼓と同じ

大鼓 ◎ ゆるむとも、よもやのきしの、かなめんし、鹿島の神も、やし、あらんかぎり

たてやなぎ、とこたちたまへ、たてばこと姿もよけれ、舞はしようらん。

舞になる、鹿子走り、鈴を置き扇舞になつたら、樂はドツヂユス

鈴を持って樂、田之神にて一回、往復して終り。

注 奉仕舞、二つの時は、「今月のよき日」の代りに、

◎ しもかの松に、かかりし雪は冬の花とは見るべからん、冬の花とは見るべからんや。

願解きの場合は

◎ このほどは、おのえにかけし、願神樂 今こそ解けれ、神の心へ 今こそ解けれ、神の心も

10. 古文 献

成川の諏訪大明神（南方神社）は寛永七年（一六三〇年）に有馬右近祐純直が願主になり建立した。以来有馬家は神官を二十八代にわたって勤められたという。

有馬家の系図により神舞にゆかりのあるものを抜萃する。

光久公児ヶ水御湯治之節、純定度々御前へ召出サレ、於諏訪社頭神舞御覽アリ自純定宅江御入遊バ寸、
公直翰ノ諏訪神号乃黒絵、布袋緞子、狩衣緞、子狩衣、御盃等拝領慶安（一六四九年）二年丑年十一月七日

六、特 色

戦前に神舞は行なわれていたが、人手不足となり一時跡絶えていた。

昭和二十四年に復活し、三年おきに行なわれている。

七、現 状

保存会は整備されており、後継者も心配ない。

一、大山棒踊り

一、名称

大山棒踊り

二、所 在 地

鹿児島県掛宿郡山川町大山田上部落

三、時 期

秋祭りに行なう。

四、芸能の内容

1. 由 来

島津日新公が庶民の忠誠心を培うために踊らせたとも伝えられている。

五穀豊穣を祈願して農民の間に伝承されて来た。

2. 構成する人々

歌手は三名 男子 矢旗は三名 男子（踊り子の前）

踊り子は二十四名 男子

3. 組 織

過去において芸能に参加した人々は、大山に居住する農村青年 男子 十六才～三十才、現在は中学三年生

小学校三年生男子

4. 扮 装

ユカタ、腰紐、伊達巻、たすき、（紫・赤・黄）鉢巻、けはん、わらぢ、手こ、棒、（三尺棒、2尺八寸

85 cm

六尺棒、4尺(121cm)、矢旗、

5. 設備

二十四名が三列に並び踊る。

一組六名の踊り子の踊る長さは約四米、総計二十四米の長さが必要

6. 演目(おどりの種目)

入場—中踊—退場の三つ

7. 芸能(おどりかた)

一、入場の時、歌にあわせて踊り子が進む。(入場する)

一、三列に並んで右側に三尺組八名

二、歌に合わせて二回おどり、一回ちようしをとり、後踊り一回行なう。

一、退場は入場した所へ、向をかへながら進む。

一、歌は六回歌う。

一、歌に合わせて二回おどり、一回ちようしをとり、後踊り一回行なう。

8. 歌詞・詞章

大山棒踊り歌詞

一、お城は山で前は大河
二、よめじよが通る、よせでなぢうさめす
三、かまんえがおえだ、さんばおぐえだ

四、きよめの雨は、三度ばらじぐ

五、きりしま、まちは、こがね花ざかい。

六、やけのゝきじは岡のせにすむ

七、やまたろがにえは、かわのせにすむ

例えは「一、おしろは、やまで、まえは、だいかわ」は、

「⁽¹⁾一、⁽¹⁾イイ、⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾ア、ヤバハ、サ⁽⁵⁾ア、⁽⁶⁾エ、⁽⁷⁾エヘイイヨオヤアアヤレ

おしろは、ヤハハ、サやアまで、ヤアーソウライヨーホホ、ホネエナサア

マーアアア⁽⁸⁾エ、エイイーエーへ、ヘーオーヨーオーダー

アラソイソイ、だーアアアアア⁽⁹⁾イイイ、イイイ、⁽¹⁰⁾アアア、⁽¹¹⁾アアア

サツサア、サツサ」と歌う。(一は言葉を引つぱる)

五、特色

アラソイソイ、だーアアアアア⁽⁹⁾イイイ、イイイ、⁽¹⁰⁾アアア、⁽¹¹⁾アアア

一、農村の踊りである。

一、明治十八年～十九年生れの人達が、昭和二十二年～二十三年にかけて指導した。その時、二十余年ぶりの復活との話であった。

一、今度昭和四八年に復活し二十五年ぶりである。

六、現状

保存会の整備をすすめ、後継者育成中である。

（原稿）農村の踊りである。昭和二十二年～二十三年にかけて指導した。その時、二十余年ぶりの復活との話であった。

（原稿）農村の踊りである。昭和二十二年～二十三年にかけて指導した。その時、二十余年ぶりの復活との話であった。

三、大山馬方踊り

一、名称

馬方踊り

二、所在地

鹿児島県掛宿郡山川町大山

三、時期

戦前は大山寺開教記念に、戦後は三月の農村慰安演芸会で踊る。

四、場所

別に指定されたところはない。

五、芸能の内容

由来

むかしは、天然痘が流行して、神仏に頼って治癒につとめた。そのため伊勢神宮や熊野神社にホソが軽くてすむように祈願したといふ。馬方踊りは千龜女と馬方がその神詣の道中の対話を交えながら表現したものである。

2. 構成する人々

千龜女 一人 馬方 一人 四人 女 方 一人 唇い手 一人

3. 組織

性別 一 女（女子青年・婦人会）

千龜女 一 （十七、八才）

馬方 一 （十八—二十五才）、唄の上手な人、

女方 一 （十五才—十六才）

4. 扮装

千龜女 一 髪を島田に結う。着物（据模様）約一米ほどの竹か木の棒に色紙を巻いたものを持つ。

馬方 一 髪はチヨン曲、白絆、博多帯をしめ、手甲をして、白足袋をはく、

紅白の布で作った約二米ほどの手綱を持ち鉤をつける。

女方 一 着物の中着（重ね）を着る。黒の伊達帯をしめる。

芸能（おどりかた）

女方がホソ踊を踊りながら四人出てくる。次に千龜女（二人）が唄に合せて出て来て、馬方（四人）と掛け合ひながら踊る。最後は女方のホソ踊となる。

6. 歌詞・詞章

「馬方節」

われはもとより馬方なるが、駒に心をいさめられる

千龜女 ヤイ馬子、駒借いましょ

馬方 馬子の衆は駒貸しましょ

千龜女 駒の心はなんと

馬方 駒の心はなるほど無事でござります

千龜女 さらば乗るほどに口をたのむぞ

馬方 ハイ心得ました ハイハイ

千龜女 ヤイ馬子急いで駒を寄せおれ

馬方 ハイハイ心得ました

千龜女 この調は何んというの

馬方 この調は歌の調と申しましてずんと面白い調でございます

千龜女 まことに馬子が話しも変らんイコウ面白そくなよ

馬方 だんな様のお荷行に小唄のひとつでもやろで

千龜女 そうよいそなよ

馬方 はないか

千龜女 ヤイ徳兵衛

馬方 だんな様の望みの小唄のひとつでもやろではないか

「イザ やいましょ」

「サ やいましょ」

「神はお伊勢のおはらいはこよ

参ればその日の清人になる

おさればげにも ハイハイハイ

百に三升の食をつけ、一足

三文の番をはき、何足が不足にあるかや駒

これが即ちお伊勢様でございます

ハイハイハイ

千龜女 ヤイ馬子 馬子どもは

なぐさみいたしおれ

馬 方 ハイ心得ました ハイハイ

ハイ徳兵衛

おつとめの間に小踊りのひとつでもやろで

はないか

「イザやいましょ」

「伊勢にや七度 熊野にや三度」

サードッコイドッコイ

おホソ細めに願かけた アー願かけた

サードッコイドッコイ

千 龜

ヤイ馬子急いで駒を寄せおれ

馬 方

ハイ心得ました ハイハイ

ハイ徳兵衛

小唄のひとつでもやろではないか

「イザやいましょ、サ やいましょ」

百両とっても馬方はいやよ、寒の師走の日も

六月も、駒のたずなで ハイハイ

日も暮すおさればげにも ハイハイ

いこう大儀でござった

千龜女 ハイハイ

さほどもござらん ハイハイ

六、現状

伝承者が存命しており、後継者があれば復活は可能である。

四、成川前蘭馬方踊り

一、名称

馬方踊り

二、所在地

鹿児島県掛宿郡山川町成川前蘭部落

三、芸能の内容

1. 由来

馬方踊りのできた時代はつまびらかでない。しかし、ある立派なお城のお殿様が、二人の姫君にお伊勢参りをさせたため、奴と馬を準備させ、その奴には姫君の大切な荷物を預け、馬方は馬に姫君を乗せて引きながらお伊勢様までおともさせた。その道中のさまざまな様子をかけ合いや踊りによって表現したものだと伝えられている。

2. 歌詞・曲調

奴……赤さご奴ひげ奴 よんべも300はめこんだ、はだしに道中はあるもんか、新まちや いしわら
ごいしわら、いしわらせきだは音高い、音の高いのがきらいなら、いっそ新まちややめたがよいよい
300さか手にひっちゃかぞろまち、こっかいさかては よいはっちょ、新茶入れはな茶わんもって

こい。どっこい、どっこい、どこーいす、どこーいす。

ぞうり取り奴……ぞーいぞい ゾーいぞい 旦那のぞーいは ひげおのぞい

ぞーいぞい ゾーいぞい 旦那のぞーいは ひげおのぞい

ぞーいぞい ゾーいぞい 旦那のぞーいは ひげおのぞい

(二人の奴は旦那様(姫君)の荷物を、もう二人の奴はぞうりをもって行く中に、にぎやかな音の高い新町までやって来て茶屋についた。そこで新茶を入れてくれとさいそくをしている様子)

せんがめ(唄・踊り)……はらおごしろの姫君は、お伊勢に心をおもむけば、花の都をおしのびて、すすか山をも うちすぐて、関のお地蔵様につけにける。

(ある良いお城の姫君は、お伊勢参りに心を向け、花の都を後にして、すすか山をもうち過ぎ、とうとう有難い関のお地蔵様にお目にかかれた。)

馬 方……われはもと良い馬方なれど、駒に心をいさめられ、駒あんやろ、駒あんやろの。

(私はもとから馬方であるけれど、今も更に馬に心を引かれ、馬はとても優しくて、可愛いいやつ

じや)

せんがめ……やいまご 駒かいましょ (やいまご 馬に乗せてください。)

馬 方……駒かしましょ (旦那様、どうぞ馬に乗ってください。)

せんがめ……駒の心はなんと (その馬のごきげんはよいのか。)

馬 方……なるほどぶじでござります (はい、大変気げんがよく、御心配ございません。)

せんがめ……さらばのるほどに口をたたのむぞ
(それでは乗るから馬のたづなをしつかりたのむぞ。)

馬 方……こころえました。(かしこまりました。)

せんがめ……やいまご、このちょうは何と言ふぞ

——やいまごの唄を聞いて——

(やいまご この唄の調子は何と言うのか。)

馬子……このちょうは、唄のちょうと申して、ずんとおもしろいちょうでございます。

(これは、大変おもしろい唄の文句でございます。)

せんがめ……まことにまごが話に変らぬ、いこうおもしろそうだよ。

(なるほどまごの話の通りに、大変おもしろそうだな。)

馬方……なるほどなるほど (もともとでございます。)

せんがめ……やいまご 小唄の一つもやるではないか。

馬子……いざやいましょ、さあやいましょ。

(唄・踊り) ……神はお伊勢のおはらいばこよ、見ればその身のきととなる。おごしゃれば誠。

(心よりお伊勢様にお参りすることにより、身も心も清められます。)

馬……はいはい、百二三十のはみをして、一足三文のくつをはき、何が不足にあるかや、駒はいさみや

駒、これが即ちお伊勢様でござります。

やい徳兵衛、旦那様のおつとめのまに、小踊りの一つもやろではないか。いざやいましょ

さあやいましょ。

(たべものもよく、上から下まで満足な仕度をしていながら、更にこれ以上何が足らないと言うのか

さあいそげ、そらいそげ、ここが、お伊勢様だよ)

(おい徳兵衛、 旦那様の参拝しておられる間に、小踊りの一つもやろうではないか。さあやりましよう、さあやりましょう。)

(唄・踊り)……おほーそお望みに、さあ着せ ソイジャ があんた ああよいさーあんさーあん
たてーたさあ どっこい。伊勢に七度 さあくま ソイジャ のおにさーよいさ あんさあん さー
んど さあどおっこい。

(ほうそにかかるないように、がんたてに伊勢に七度、くまのの宮に三度、おがみにいく。)
せんがめ……やいまご いそいで 駒をよせおれ

(やいまご いそいで 馬を連れてきてくれ。)

馬 方……心得ました やいとくべ 旦那様のおげこうに

小唄の一つもやるではないか。いざやいましょ、さあやいましょ。

(唄・踊り)……関のお地蔵は親よりましよ。思い思いの妻たまる。おごしゃれば誠。

(お地蔵さんは親よりも、もつともっと、多くの人々に大切にされ、色々な思い思いの妻を持たせていただいている事を心より感謝申し上げます。)

せんがめ……やいまご 駒を立ておれ

(やいまご 馬に乗る準備をたのむぞ。)

馬 方……心得ました。

(旦那様 早く お馬にめしませ。)

せんがめ……これから いとまやろうぞ
(これからひまをやりましよう。)

馬 方……はい はい はい
(これからひまをやりましよう。)

赤さこ奴……どっこい どっこい 赤さこ 赤さこ お国はどこだ

赤さん国さ 赤さこ奴 ひげ奴

舞方……さてもその内姉妹は、都をさしてのぼらるる

すげの笠で顔をかくし、まだ世をこめし枚方や

行けばほどなく淀川の、南をはるかにながむれば

やはたはちまんふしおかみ、伏見の里をよそにみて

かとおたどろくほどに、京都にもなりぬれば

三多道路を抜けすぐで、やさんかの

(唄・踊り) ……伊勢の路をふめば、伊勢はやさしやすなまでも。

このちようによ もののちようによ 二人、どのが姉やら妹やら。

「お伊勢まで立ち寄つてみれば、やはり伊勢はとても優しく、二人の姉妹を見かけ、ふとどちらが姉か妹かと思わせた。」

五、利永琉球人拿踊り

一、名称

利永琉球人拿踊り

二、所在地

鹿児島縣掛宿郡山川町利永四六八番地

利永公民館

三、時期

鹿児島縣掛宿郡山川町利永四六八番地
利永公民館

四、芸能の内容

1. 由来

この踊りを利永では「ヅグジンオドイ」とか「ヅグジン」と言っている。

江戸時代初期の薩摩の琉球出兵以降、薩摩への進貢を求められた琉球からの使節達の踊りをまねて踊られたのが、今日まで受けつがれてきたものとされている。

琉球からの使節は、山川番所で検問を受けるために、山川港を重要な中継地とした。

また、当時、南の島々から鹿児島に向かう船にとって、鹿児島湾の入口にそびえる開聞岳は航海上重要な目印であり、その山麓に祭られる枚聞神社は航海安全守護の神として、航海者達の崇敬は深く、薩摩への進貢が済むとその都度、神徳^{ヒノカミチ}贊仰の額を奉納したという。

山川から利永を経由して枚聞神社に通じる道は、当時、頃姓山川筋と呼ばれる重要な陸上交通路であり、琉球使節一行もこの道を通って枚聞神社に参詣したものと思われる。

火山灰地で、極度に貧しく、娯楽などというものにも恵まれなかつたにちがいないこの地方の農民達にとって

琉球王室につながるこの使節達の異国風の文化は、もの珍しさを通り越して、おそらく、まばゆいばかりのかがやきをもって、強烈な印象を与えたのではないかろうか。

琉球人達の踊りは、この地方の農民達に、あこがれにもにた安らぎを与えるものとしてまねられ、親から子へと引き継がれるうちに次第に自分達の踊りとして、村の大事な催しの折々に踊られてきたものと思われる。利永の琉球人踊りは、「カサ踊り」と「かれよし踊り」の二つから構成され、それが次々と踊りわけられていく。「カサ踊り」では、薩摩への使者達が、生きて再び琉球に帰れるかを危ぶみ、涙ながらに肉親と別れ、決死の覚悟で船出したことや道中のようすなどがしのばれる。

「かれよし踊り」には、無事大役を果たした使者達の安堵の思いがこめられている。

「カサ踊り」の歌詞の中には、琉球古典音楽の楽曲の一つである「上り口説（ヌブイクドウチ）」や「下り口説（クダイクドウチ）」の歌詞と同じもの、または似たものが随所に見られる。

「上り口説」は、首里城から那覇港を出て薩摩までの船旅の次第を道行口説として詠み込んだもので、沖縄では祝宴の初めに踊られるものという。

利永の琉球人踊りが、村の祝典の際に踊られてきたことと符節を合する。

「下り口説」は、薩摩の仮屋（琉球館）を出た一行が、海路はるか乗り超えて無事那覇港に着くまでの道中が歌い込まれている。

ところが、利永の琉球人踊り「カサ踊り」には、琉球の「上り口説」と「下り口説」の歌詞が入りまじっていいる。長い年月の間の変容がしのばれる。

構成する人々

踊子（青年一〇名 小学生一四名） 嘩裏方（二名）

3. 扮装

紺の着物に黄色と赤色の帯をむすぶ。青色の鉢巻、腕カバー、前掛をする。脚半、足袋（白）草履をはく。

4. 設備

小太鼓（三）、笛（一四）、番傘（三）、鐘（三）、扇子（六）

5. 演目（おどりの種目）

傘踊り、カレヨシ踊り

6. 芸能（おどりかた）

踊り子の長さ二五M 踊り子の隊列二列徒隊 踊り子の幅一〇M

7. 歌詞・詞章

○琉球人傘踊歌

一、物の見事は那覇の町

赤い物売り煙草売り

二、白い物売り豆腐売り

黒い物売り紺地売り

三、物の品々売払うて

むらやはたまた親と兄弟

四、連れて別れる旅衣

袖と袖とのすよ涙

五、袖に浮く露押払うて

二度と帰らぬ那覇の町

六、那覇の川口出るときは

伝馬こぐいさば船

七、船のとづなとぐときは

船いそいでや帆引けば

八、風はまともで馬ひつじ

那覇を出てから今二日

九、雲かかすみか浮島か

間に見ゆるは屋久永良部

十、島にみならぶ三つの島

一つ見ゆるはかすみかな

十一、煙絶えずの硫黄島

○鯨吉の歌

佐多の岬を立てならぶ

十二、西をおがむはお開聞

股ごし瀧をすれすれと

十三、内の山川ない入れば

番所検め相すんだ

十四、風はまともで馬ひつじ

知林小島を後になす

十五、富士山に見まちがう桜島

最早鹿児島ちよの浜

十六、ちよの浜から琉球見れば

琉球の新橋思ひ出す

五、特色

ゆるやかに踊り、あざやかな着付である。

編集後記

「山川の文化財」が第七集となつた。

第一集は、昭和五十三年度現在の「町内指定文化財」の概要を、第二集は、「旧正龍寺跡」の調査報告を、第三集は、「地頭仮屋跡」「成川下原の田の神像」「成川十一面觀音」の調査報告を特集した。

第四集は、山口綱義の「休暇日誌」を、第五集は、「山川の水産史」を、第六集は「徳光神社と前田利右衛門」を特集した。

そして今回、第七集は、「民俗芸能」である。

これらの発刊物は、出来る限りの客觀性と実証性を追求しているが、まだ十分ではないかも知れない。

町民各位のご叱正と多様なご活用をお願いしたい。

昭和六十一年三月十一日

山川町教育委員会

山川の文化財は、なんの事か
思ひ出せぬ事であります

おもとたまに見る

子供の頃はとても身のつかない事
思ひ出せぬ事であります

十数年前は山川町の文化財

十六、あるの城から流されれば

遺産の物語

昭和六十一年三月三十日

「山川の文化財」第七集

発行日 昭和六十一年三月三十日

編集 「山川の文化財」編集委員会

著者 山川町教育委員会

序文 本は山川町の文化財を記す。出来てから十数年

「山川の文化財」第六集
TEL ○九九三三一五一一九八二

著者 山川町教育委員会

十一、山川町の文化財第六集

著者 山川町教育委員会

TEL ○九九三三一四一〇〇一

著者 山川町教育委員会

